

令和3年度第1回総合教育会議議事録			
日時	令和3年8月10日 13:30～15:40	場所	真庭市勝山文化センター第1会議室
出席者	市長 : 太田 昇 教育長 : 三ツ宗宏 教育委員 : 井口利美、常本直史、徳山周一、高谷絵里香 政策アドバイザー : 荒瀬克己、山下陽子、山本健慈 オブザーバー : 豊田涼(真庭高等学校長)、池田浩規(勝山高等学校長)、室貴由輝(岡山県教育庁高校教育課高校魅力化推進室長)		
協議事項	・高校魅力化事業について		
経過及び結果	<p>○開会 市長あいさつ</p> <p>コロナ禍の中で会議になった。この会議は毎回公開で行っている。今日も市議会や市民の方や市外の人が来られている。教育はみんなが一緒になって考えていくもの。失敗は許されないが大胆な改革も必要。少子高齢化の中、安全でここで生きていこうと思える地域を作ることが大切。人口密度は、ヘクタールあたり日本全国が300人程度のところ、真庭市は50人ちょっと。全国の6分の1。フィンランドは確か15～6人、人口は500万人で北海道や兵庫県並み。100年前は貧しい国の一つだったが、現在は世界一だと自負している。人口が減っても活力をもって永續できる地域を作ることができる。それがSDGsの理念であり目的。一番大切なのは人材。地域を担い、世界的視点を持ちながら地域で生きていく人が必要。そのためには義務教育も大切だが、高校は人格形成をする大切な時でもあり非常に大切。この場所で自分は成長するんだという学校、地域になってもらい、外からも来てもらいたい。そうなるように私たちも努力していく。出生者数も減っているが、外からも来てもらいたい。岡山県教育委員会の室室長、市内両高校長、いつものメンバーで自由闊達な意見交換をしたい。よろしくお願いします。</p> <p>○前回の議論の振り返りと今回の議題について</p> <p>事務局：現在、真庭市では「市内の高等学校をいかに存続させていくか」「いかに中学生に選ばれる高校にするか」「そのための魅力とは何か」といったことを議論している。</p>		

その問題意識から、今年 1 月に、「多様な自己実現や自己肯定感」、「キャリア教育の場としての「高校」の重要性と高校と地域との連携」をテーマに総合教育会議を開催した。学習カリキュラムや地域の応援体制、文化芸術の価値など様々な観点から、問題点や可能性についての意見交換をしていただいた。その議論の中から、二つのテーマが、「地域の魅力化」とも地続きであることが明らかになった。

本日の議題は、前回の「高校との連携」から一歩進めて「高校の魅力化」として。今回は、3 人の政策アドバイザーの方々に加えて、勝山高校の池田校長、真庭高校の豊田校長、さらに県教委の高校魅力化推進室、室（ムロ）室長にもご参加いただいている。専門的な知見や現場のご意見をいただきながら、活発な意見交換をお願いしたいと思うが、協議に入る前に、事務局の方から、前回会議のキーワードをいくつかご報告、ご紹介させていただく。

- ・一人一人の生徒が、他者を尊重し、自分のよさや可能性を認識すること、自ら主体的に学ぶことにより自らが成長できると認識できることが大切。
- ・持って生まれたものはみんな違う、自分自身とフィットしたものを認められ、褒められると、自己肯定感になる。
- ・どうしたいのかぜひ高校生にも入ってもらって考え、一緒に作り出すことが地域への定着につながるのではないか。
- ・小中から高校までを繋げ、社会に開かれた教育課程として、学校・自治体・産業界が一緒になり、新しいキャリア教育、カリキュラム開発をしていきたい。
- ・高等学校を、何のために残すのかという時に、子供たちにとって意味のある残し方でなければ、大人の勝手な発想にしか過ぎない。
- ・どんな高校を中学生が求めているのか、なぜ中学生が地元の高校に行かないのか、大人の発想ではなく、その答えを持っている子どもにも意見を聞くべき。
- ・高校の問題は地域が持続的に発展するため、維持していくために、切実な問題。
- ・誰のための学校なのかということを皆で考えて共有しないと、高校がなくなっていく。
- ・地域の人に育ててもらったという思いがあれば、将来、地域に貢献したい、地域を持続させたいのという思いにつながるのではないか。

「まとめ」として

- ・子どもたちにとって自分が将来生きるために、その学校に行くことで自分が魅力あるものに成長できるということがない限り、高校あるいは地域は消えてい。
- ・どのような地域を作っていく、子供に継いでもらえるようにしていくということが原点
- ・次の真庭を担う若者を育てる教育機関であるという観点から、実のある高校教育をしていただくために、真庭市として応援していきたい。

○協議

市長：三ツ教育長と室長から問題提起と情報提供をお願いしたい。

教育長：前回の議論を踏まえて、もう一度高校は持続可能なのかということに向かい合いたい。結論から言うと、可能性はある。子どもたちにとっても、高校魅力化を進める中で、可能性が高まる。どこに可能性があるのか。あえて真庭で学ぶ価値があると考えている。

1 つ目は、地域資源、あるものもないものも含めて、これを生かし、生涯を通じて体験と達成感を伴った学びを作り上げる条件がある。前回は議論した。真庭市自身がその思想をもって未来を描くまちづくりを進めている。その地で学ぶことに意義があるし、貴重な教材である。本当の豊かさとはなにかということを考える契機となる。都市部と比べれば利便性は劣るし、ないものも多い。だからこそ人がつながるし、工夫してものを作り出す。その姿を見せる大人もいる。子どもにとってロールモデルが身近にいる。手を携えて協働する仲間が生まれつつあるという強みもある。

2 つ目、真庭市は2校3校地となる。地域とつながって学ぶ専門高校、意志ある若者を育む進学校、個々の特性に応じた体験的探求的な学習を進める普通科高校。それぞれの高校が今以上にその特徴と個性を生かすことで、全体として一人ひとりの個性が輝く教育環境が作れる。高校真庭だからこそその多様な人生を応援する可能性があると考えている。

地域課題に対して、探求して行動する学習を通じて、答えがない時代に生き、地域の持続を担う人が育つ。着けた知識を生かして、課題を解決する力が、これからの時代には必要。対話して考え、協働し、挑戦する力を育むと同時に、自分と他人について幸せとは何かを考え互いに応援する人間性を育てたいし育つ。少子高齢化や人口減少という課題先進地として、真庭がこの挑戦を通じて最先端になれる。

この可能性から現実性へと高めないとはいけませんが、そのために大切にしたいと考えている3つの視点がある。1 教育内容の充実。高校だけでなく、キャリア教育を小中学校を通じて接続させ、地域資源を生かした課題解決型の学習の充実を図っていく。2 地域や県、市の垣根を越えて高校と高校生の学びを応援するコンソーシアムづくりを進める。3 高校教育を支える環境整備。教育課程外の学びとして、生活環境の支援や地域とのつながりが考えられる。高校だけではなかなかできないことばかり。県、市、地域が一緒になって考えて実行していくことが必要だと思っている。

そのうえで高校の持続を考えるならば、数といふものがある。中学校見込み者数の推計を見ると、当面70%が市内に進学するとして計算した。来年度320人

程度の卒業生で考えている。定員にこだわるつもりはないが、勝山4学級維持で、120人程度、真庭存続と合わせると250人以上は安定的に入学してもらいたい。そうすると、真庭市中学卒業性だけでは足りない。真庭市だけの状況ではなく、同じ状況は全国にある。岡山県と手を結んでどこを目指すのか。まずは市内の卒業生から入学、県内からの入学者を増やす。県内外からの入学生の確保は、高校の多様化と活性化を図る面からも、存続のためにも重要なことだ。

今まで人の流れは、田舎から都市部だった。この流れを変える挑戦が求められている。じゃあそれは誰が担うのか。2つの視点がある。1子どもは未来そのものなので、様々な垣根を越えて社会全体で子どもを育む必要がある。2他地域からの高校生は得がたい関係人口である。高校があることは地域にとって大切な資源である。魅力の中身は、教育内容が一番。同時に、真庭に来た意志ある若者が安心して生活できる、学校内外で学びたいことが学べる必要がある。高校魅力化は、総合的に真庭市全体で高校生の人生を応援することだと考えている。

問題提起をしたい。ひと、もの、ことにかんする総合的な取り組みをしないとけない。高校だけではなく、小中、生涯学習も含めて考えている。どう進めていくかを検討したい。

室室長：学校がなくなるかもしれないという話題の起点は、H31年の県立高等学校教育体制整備実施が策定されたこと。再編整備の基準が示された。R5までに再編整備を検討するとしている。この間、各学校で魅力化してほしいということが描書かれている。7年までにアクションプランに基づく再建整備を実施することになった。

再編整備の基準は、1学年の生徒数が100人以下で再編対象、80人を下回ることで2年連続と募集停止。この基準をもとに魅力化を進めている。県内の小規模は、蒜山を除き1学年120人で、どこも魅力化に取り組んでいる。

この中で、真庭市内の高校も2校3校地になる。勝山が普通科のみ。真庭高校久世校地は廃止し、落合校地の普通科を廃止して経営ビジネス科と食農生産科を作ることになった。特徴的なのは、普通科と専門科が一緒になるところが多いが、真庭市は普通科と専門科を分けたところ。これを残していくために話し合っていると思う。

魅力化には、小中学校でのキャリア教育の充実が不可欠になる。今までは成績で普通科と専門科を選んでしたが、キャリア教育を充実させることで学びたいことを学べる学科選びをする。価値ある学びをするということを子どもに意識付けをすること。目的意識をもって学校選びをする。これが高校存続に必要。

普通科と専門科を分けたことで、学校間の交流が重要となる。普通科と専門科があることで多様な学びの幅があったが、それを補う。この交流が当たり前ができる環境が真庭市にあることが重要。学校をつなぐコーディネータが必要。スムーズに交流できる。

高校を維持するためには、管内外からの生徒を確保することが必要。教室内の学びが大切。次にここでしか学べないことがある。そして、多様な人との交流や体験。ここが貴重になっている。大学や社会に出るところが重要。大学に行ったらいろんな人に相談するが、その相談相手が真庭市内にすることが大きい。非常に重要なこと。そして、学校と地域をつなぐコーディネータが重要。学校内と学校外の学びをつなげることができる。有機的なコンソーシアムも重要。学校で育てたい人物像を地域と企業と一緒に考え作り上げること。

これにはマイスターハイスクール事業が活用できる。これを発展的に使えるかが大切。真庭高校で始まるが、これを勝山高校に横展開できる。

生活環境が充実しないと、県内外からの生徒が来ない。寮が重要。ハウスマスターがサポートできればいい。公営塾で学力を伸ばす。他県ではしている。ここでもコンソーシアムの支援が必要。県内からもそういう動きがある。息子の友達も県外の島の高校に行く決めてる。保護者もそういう学びに期待している。

真庭ライフスタイル、真庭で取り組もうとしていることそのものが教材になる。新しい仕事を作る、エネルギーを作る、価値をつくり、生き方を作る。豊かさとはなにかを考えていることが、教材になる。それが、真庭ライフスタイルになる。生徒、保護者、教員だけでなく、まち全体で教育に取り組むことが必要で、真庭ライフスタイルが実現できると考えている。

市長：教育委員会からマイスターハイスクールについて補足してほしい。

赤田教育次長：文部科学省次世代産業人材育成事業として真庭高校を対象にして応募し、5月に採択された。真庭高校だけの問題ではないということで、勝山高校も含めて魅力を高めていこうということで、真庭市高校魅力化基本方針の策定を進めている。現在、勉強会での学習を進めている。8月28日には、高校魅力化シンポジウムを開催し、市民に広く呼び掛ける。市全体の方針策定後にマイスターハイスクール事業に取り組みたい。

山下先生：マイスターハイスクール事業について具体的にはどうということをするのか。

赤田教育次長：社会に開かれた教育課程を作るもの。産業人材を育むというモデル事業。学校設置者の県教委、真庭市、産業界から事業者の3者で新しい教育課程を作る。事業推進のため、自治体から教頭相当職をCEOとして派遣する

ことになっており、産業界からは実務家教員を派遣する。3年間取り組む。

山下先生：カリキュラムを考えるとと言われていたが、弾力的なことができるのか。

豊田校長：条件が厳しい事業。スーパーサイエンスハイスクールに近く、その産業版だと考えていただきたい。切り口が違う。主体は自治体。連携する事業者から社員を実務家教員として派遣してもらおう。カリキュラムを作りたいが、3年間のみで、3年たってもいきなりやめることができないので、本校が決める基準の範囲内でやる。教員がしていた部分を実務家がすると考えている。学校にお金を使うというよりも人にお金を使うもの。真庭高校としては、実務家には教員として生徒の対応してもらおう。CEOがコーディネータとなる。管理職の教頭として常勤になるので、難しい面もある。実際にスタートしているが、具体はまだ決まっていない。

山本先生：マイスターハイスクール事業が議論になったが、文科省の政策になじむようなことは失敗する。モデルの隠岐の島前高校の例は海士町長が岩本くんを連れてきてやった。これが県全体に広がっている。文科省はこれを取り入れようとしているんだと思う。飯南高校とか島前高校とか実際に行った。島根大学が地域魅力化コーディネータ養成講座をするということで、岩本君の企画をやっている。

島前高校の教務担当が10年やってやっと胸に落ちたと言った。違和感がずっとあり辛かったと。これまであった高校の文化と地域密着という文化が違う。このストレスが高校にはあった。そうだろうなあと思う。町長もコーディネータがやっているのを見ていただけ。

太田市長が一番責任を取らないといけぬ。これは地域をどうするかという問題。

私は1948年生まれで、人口が8000万から1億になるのを見た。今後は、あらゆる人口政策が失敗して人口は増えないので、孫が私の年齢のときは5000万を切るかもしれない。その時にこの真庭市がどうなっているのかという想像力が必要になる。

2015年2月のあるセミナーで山田京都府知事さんが講演した。増田寛也が地方消滅論を出した直後だった。山田さんはこっぴどく批判された。京都の北はイノシシとシカ、サルに任せるとのことかと怒っていた。京都市と南があればいいという話になる。全体に分散するという話にならないと言われた。私がいた和歌山大学もイノシシが出ているところ。2100年を想像したときに日本がどうなるのか。国策は九州と北海道はいらぬと言っている。リニア新幹線沿いに人口がいればいいと言っている。原発周辺も動物しか住まないで原生林化している。それに対してどうするかということ。

高校は和歌山も大阪も再編を議論している。高校を残す価値がないからなくす

ということではない。地域をどうするのかということ。今までの流れに逆らってここに人を残すのか。

単なるカリキュラムの問題ではない。飯南高校では立ち上がったのが新制高校の一期生のおじいちゃん。地域で都会から来た青年を育てている。一度は都会に出ても地域にかえって来いと。都会で挫折したりいろいろあるが、一人ひとりに寄り添い、癒して支える。それが人を育てること。この地域をどうするのか、高校をどう位置付けるかということを自分たちで考えないと、国や県の政策は昔の政策の焼き直しになる。

市長：人口が減っても安全で活躍できるように、この地域が存続するためにどうするのか。価値観そのものを市民が変えないといけないし、それを提起し続けている。だからこの会議も公開している。文科省は手探り。好きにやってもらっていい。お金のことも考えなくていい。従来の発想は変えてほしい。文科省を変えるぐらいで。彼らも悩んでいる。遠慮せずにやってほしい。

荒瀬先生：山本先生の話は、先を見越したことで、絶対に忘れてはいけないこと。人口が減ったときにどうなるのか。未来に原点を置いて考えないといけない。

市長の言葉で思い出した。京都にいたときに堀川高校にいた。高校を今までとは違う高校にしようとしていた。市からは好きにしたらいいけど、責任はとれと言われた。これはチャンスだと思う。

スーパーサイエンスハイスクールは文科省の唯一の成功だが、マイスターハイスクールおそらくそんなに先を見越していないとは思っている。学校選定科目でやることになるが、74単位以外は自由だから、教育課程をどう組み立てるのかということを考えて、両高校に教育課程を作してほしい。

福島県のふたば未来学園のことだが、震災以降に8つの町村が集まって、子どもたちをいかに戻すかということ議論をしていた。戻すということでもいいのか、子どもの健康に影響は大丈夫なのかと話したようなときだった。大人の思いは、ひとえに故郷に子どもを取り戻すということ。これは大人の論理。子どもは避難した地でなんとかやっていこうとしていた。子どもにとって戻すことが幸せかわからない。

議論をする中で、著名な人が講師に来るという話もあった。でも議論の中で地に足がついた教育課程を作ろうということになった。トピック的なもの、平田オリザとかのイベントなどをしようとする話もあったけど、入学して卒業するまでの間にどんな体験をさせ、どんな能力をつけるのか、どのように評価するのかという教育課程を作ることになった。それが魅力になる。それが魅力にならないなら学校はいらないとなった。教育課程に魅力がないと子どもに意味がない。

今その学校の教育課程は防災が柱としている。なぜ防災なのか、そして自然との関係はどうか、なぜ災害が起きるのか、災害になるのはなぜか、人が住んでいるから災害が起きる、どんな生活が災害に強いのか。そんなことを子どもたちが考える教育課程を考えてやっている。そういうことが、理科や数学、国語の教科につながる。

子どもたちを主語にしてどういことをするのかということを考える、問いかける機会を作ってほしい。子どもたちのアイデアだけではまとまらないから、大人が助言をするようなこと。真庭高校がそれをしているのならそれを生かす。教育課程なしでは学校は成り立たない。決まったことを決まったままではなく、柱になる教育課程を作ってほしい。

池田校長：昭和 37 年に商業科今のビジネス科ができて、5000 人の卒業生がいる。女学校から出て、旧制中学になった。多彩で相当の人材を輩出している。H8～12 年いたが、ちょうど高校が伸びてきたとき。落合高校があって、津山高校がある。久世高校と落合高校が統合し、どうなるのかと思っていた。旧久世町の子どもが勝山に来てくれて、普通科として進学できる学校になっている。

今年久しぶりに帰ったら、学力が厳しい。進学もよく善戦していると思う。赴任したら来年度以降の教育課程はできていた。かなり柔軟な科目が設定されている。多様な学力の生徒に対応するためだと思う。

勝高どうするのかと地元の人にも聞かれる。日々どうしたらいいのかと考えている。単位制に移行する。教員を確保するために、いい人材を引っ張ってきて、教員を育てたいと思っている。県北の教員を確保したい。教員養成にも取り組んでいる。蒜山校地は全国募集をかけている。それができる素材や資源がある。馬は資源としては厳しいが、冷涼で自然環境がとてもよく、少人数教育ができるという資源がある。蒜山で学びたいという子どもがいて、1 年生 13 人、2 年生 7 人、3 年生 22 人の 42 人だが、教員がしっかりと関わっており、子どもが伸びていて、私が行っても楽しい。

荒瀬先生：教育課程について。学習指導要領の前文に、教育課程とは一人ひとりの生徒が自分の良さや可能性を認識することができるもの、と書かれており、まさに自己肯定感。だからこそ、あらゆる他者を尊重することができる、多様な価値を受け入れ、あらゆる変化に対応できるかどうか、豊かな生活を築くことができるかどうか、持続可能な社会をつくことができるかどうか。その力を養うことが教育課程だと書かれている。これは初めてのこと。

生徒が、学んだことを踏まえて、次にこれをやってみようか、次はこれを学ぼうかという子どもの次の持続的な学びにつなげられるか。こういう教育課程を作っている学

校はない。この機能を果たしていない。学習指導要領のルールは守っているが、その機能まで実現できていない。

高校は教科の専門性が高いので、教員同士が話していない。生徒一人ひとりに焦点を当てていない。少人数ならできる。ほかにはない魅力になる。学習指導要領どおりの教育課程が作れば、山本先生が言われていることが、子どもの自己肯定感を養うような教育ができる。成績がいいだけの学校はある。そういう学校ができれば行ってみようという子どもがいる。雲南市もやっているが、ほかによそではやっていない。この理想を実現してほしい。

高谷委員：高校魅力化は皆さん考えられてきたと思う。市の事業として大きく取り組もうということだと思う。島前高校では岩本さんがいらしたのが大きいのかと思う。キーとなるマンパワーが必要。10年かかるというのはよくわかる。3年でなんとかというのは意味がない。この3年ブースターにして10年やる必要がある。

再編整備、岡山市と真庭市では状況が違うのに数字で整備するのは考え直してほしい。

徳山委員：高校魅力化は子どもの取り合いかと思っていたが、キャリア教育を充実させると聞いて、私たち自身が考えを変えないといけない。取り合いではないと思った。

教育長の言われた3つの視点の中で、教育課程の編成が一番大切だと思う。自分の良さを見つけれられるような教育課程を地域の中に素材を見つけながら作れるか。

環境整備について。若い人を合宿に連れていくと、個室でないとだめ。蒜山も県外から来ているが、住む場所がどうなのか。ワンルームなら来るのでは。教育課程だけでなく、環境も重要ではないかと思う。企業が建てた寮や空き家を活用すれば、地域と接することもできるのではないか。

常本委員：こういうときがやっと来た。胸が熱くなった。真庭の学校同士が競争してきた。なんとか高校を残したいと思って、目の前のことに必死だった。

大切なことは子どもたちがどう変わっていったのかの見える化。地域の人に見えていない。社会人になってどうなのかということを知ってもらいたい。探求的な学習をした子どもはプレゼン能力が高い。深い勉強ができています。大学生にも負けていないと思った。

魅力化では、目立つことをするのではなく、地に足のつけた教育課程が必要だと確信した。自分のいいところに気が付いて社会の一員として生活していけるか。この子たちがどこにいても心豊かに生きてほしいと思う。次の世代に残すために、県、

市、地域が一緒になって改めてやっていく必要がある。地域の人に子どもが変わったところを見せたい。子どもたちがいい市民になれるように支援したい。市がこれほどバックアップすることはない。高校に任せるのではなく、一緒に考えていく。最前線は先生。先生が変わらないと子どもは変わらない。地域も変わる。また話していきたい。

井口委員：真庭市の小中高の学校や教育の魅力はすでにたくさんある。コロナ禍で田舎に目を向ける人が増えている。都市の人にはこの魅力をぜひ知ってもらいたい。

人口が減っていくが、世界では人口が増えてどうやって食べていくかを考えてきて、どうにかやっている。人口が減ってもどうかなると思うが、よりよい人格を作っていくにはどうしたらいいのかと思う。子どもたちが自分の将来の人生を築いていくが、その基礎を作るのは親や保護者でそこは普遍だと思うが、その基礎が大きくしっかりしていれば子どもは自分の人生をしっかりと築くことができる。それを応援するのが真庭市教育委員会だということを忘れずに、一人一人の子どものことを考えたい。その積み重ねで地元に残る子どもがいたらいいと思う。

教育長：改めて気づくことが多かった。一つは、長い歴史の中に今があるのだと、これは大切なことだと思った。過去に限らず、今後何十年先にこの真庭の地域がどうなるか、そこで生きている一人一人はどんな生活をしているのかを描くこと、どうなってほしいかを描くのが大切。もう一つは、子どもたちに自信と誇りを持たせたい。それは教育課程を通じて育むことが大切なこと。他者、自然、環境と関わりながら、その中で体験をして子どもたちは自信と誇りを身に着けていく。高校生に限らず、小中と高校をつないでくることが教育委員会の大きな仕事だと感じた。またこういう機会を作っていきたい。

山下先生：真庭の高校に2年間いた。倉敷南に行って、真庭市にいたときに生徒募集のことばかり考えてきたことを思い出した。子どもたちの学びとかを考える前に、そんなことしたら高校の名前に傷がつくとか、そんなことばかり考えていた。現場にいるときは意識していなかったが、倉敷南に行って気づいた。異常だと思った。

高校魅力化は高校の現場が責められる。管理職や教師が責任を感じすぎている。教員だけの責任ではない。子どもたちに責任を持たせすぎではとっていた。高校の持続可能性はまちの持続可能性と言われたが、進学してきたら関係人口として大切にするというのは新しい。

文科省では学習指導要領は使ってくれと言われた。同調圧力からの脱却とか女性のエンパワーメントの問題に対応することが中山間には不可欠で、それは教育に直結している。これは全国でも最先端。

自分が校長なら、一つ目は体験的な探求的な学び。総合的な探求的な時間は3～6単位。地域での学びを探求的な時間だけではなくやってほしい。倉敷南で課外でやってみたら、次年度教員が各教科の中に入れてくれた。AO入試など進学にもつながった。もう一つはオンラインを使うことで学力保証はできる。同時に教師の指導力向上が不可欠。ここに市の支援が欲しい。3つ目には風通しがいいチーム作り。北房のコミュニティスクールにかかわっている。女性、若者、ばかものの意見が通るようなチーム作りができれば、真庭は変わる。

室室長：高校魅力化という言葉自体好きではない。輝くのは子ども、学校ではない。

最初に勤めた学校が定員割れで、このままだと学校がなくなると言われていた。なんとか生徒に来てもらうのがミッションだった。生徒がどう満足するのか、生徒がどう生活するか、どう成長するかが重要。第1期の再編整備で統廃合された。3月31日で学校を閉めた。それ以降、どうしたらいいのか考えてきた。

いろんなことをしても、学校を取り巻く意識や価値観が変わらないと、なにも変わらない。生徒の変わりぶりを見てもらえない悔しさがある。大切なのは生徒の成長をみる周囲の目。

今回の学習指導要領は、「教える側から学ぶ側」に主体が変わったのが大きい。今までは教える方法を書かれていたが、どう学んでいくのかということが書かれるようになった。そして教育課程を学校外と共有し、地域と一緒に考えていく。どんな力をつけたのか、どんな生き方をしたいのかを見たいという社会を作っていこうというメッセージを感じた。簡単なことではないが、真庭市が目指しているのはそこではないのか。教育課程が実現できるまちづくり、地域づくりをしてもらいたい。可能性を感じている。

山本先生：海士町は魅力的な大人もたくさん移住している。大企業のエリートエンジニアが、ここは白紙に絵を描く面白さがあると言っていた。そういう人がいる。魅力的な大人を子どもが見る。

学校の先生が幸せではないと、子どもは幸せではない。あるところの教育長が「私の仕事は子どもを幸せにすることです。それに加えて教師を幸せにすることです」と言われた。そのためには何でもするので協力してほしいといえば、学校の先生も子どもも協力してくれる。毎日子どもの顔を見て「なにが幸せか」ということ繰り返し話していけば、そういう意味で当事者である子どもの意見を取り入れればいい。

荒瀬先生：1つ目。私も魅力化は嫌い。だれにとって魅力なのか。

2つ目。提供側の満足はとても大切。研修を提供しているが、提供側が満足感

がないとよい研修はできない。

3つ目。堀川高校は偏差値にとらわれなかったわけではない。議会でも問題になった。大学に行くだけを目的にしなかっただけ。目的の幅を広げた。

4つ目。共通テストを課さない入試を島根大がしている。高校までの成績を問わない。入学生は非常にいい。高校まではなんだったのかと考える。大学も変わっていて、入試にも対応できる。

教育長：総合的な地域づくりだし、子どもが輝くこと。子どもを真ん中に位置づけないといけないと肝に銘じた。大人も子供も、なにが豊かなのか、幸せなのかを考えたい。

豊田校長：市広報紙で配布したが、真庭高校が変わる。地元の人にしっかりと高校を理解してもらいたい。県立高校だけど真庭市のものとして知ってもらいたい。新しい科ができる。勝山高校の科を移すなんて、県内では初めて。学校としても思い切ったことをしている。思い切ってやるつもり。地元の人に学校に来ていただきたい。

市長 学校に責任を問われているというのは同意する。責任はあるが、学校任せではだめだと思う。地域と保護者が考えないといけない。個々の家庭はどうなのかということもあるが、そういう家庭こそ支援が必要。自分たちの子どもは自分たちと地域で育てると保護者にも思ってもらいたい。保護者と地域と学校がいい関係にならないといけない。

高校を変えるのも、子どもたちがこの学校に行きたい。学校の先生も大変だと思うが、逆に言えば伸びしろだと思う。真庭の高校に通って、親から見ても自分でも、成長できたことが実感できる学校にしたい。なにか目的をもって学習してほしい。単に学科ではなく、先ほど防災が出たが、そこから生きるとは、地震とはと考えを広げていくことができる。

学習指導要領のことでは、ややもすると現象面、制度に沿ったことだけを見る。なんのために指導要領があるのか根本を考えれば、いろいろ自由にできる。制度は変えられる。現象面に真面目にだわってほしくない。本質を捕まえればいい。なんのためにやっているのか教育の本質を考えてほしい。

市長としての責任はとる。地域で学校を育てていく。この地域の人が理解がないとできない。県立だが市から10億でも出す。市議会で否決されたらできない。市民の理解を得て、一緒になって、高校を変えていく。まともな教育にお金を使えば、将来に生きるということは確信を持っている。少々のことでは真庭市の財政には影響がない。真庭の高校を思い切って変えていただきたい。文科省のこの事業は、市の政策に箔をつけただけで、こだわっていない。未来を見越して真庭市の方向性を

国や市民に伝えているだけ。お金はなんとかなる。きちんとした方向性を出せば、国は理解してくれる。まだまだ緒についただけだが、方向性が将来を見据えていれば、国も理解してくれる。ぜひこの関係者にはそういう思いで取り組んでほしい。真庭だけで活躍しないでも、世界で活躍していってくれるような子どもを育てたい。校長も大胆にやってもらいたい。

○閉会

教育長：長時間熱心なご議論をありがとうございます。こうやって知恵を出し合うことが大切だと思うし、豊かだし、幸せだと思う。大人も子供も同じ。これからもご協力をお願いします。